



miho Hatanaka,

助産師であり公認心理師でもある私の職業アイデンティティを問われたら「助産師です」と答える。特に性教育は四半世紀ほど行ってきたおり、そのようにいうと何とも大きなことに感じるが、細々と、招いてもらうままに行ってきたことには感慨深いものがある。その原点に返り、授業の毎に創ってきた「いのち」の詩を、ひとつ。



【第16話 いのちのうた Ⅰ：こどものコトバ】

大学院で臨床心理学を専攻したのは、それまで10年足らず性教育を行ってきた中で心と体のつながりが重要であることを痛感し、「心って何だろう?」「これまで自分がやってきたことは何だろう?」という問いが湧いてきたからである。つまり性教育は私の歩みの原点とも言え、職業アイデンティティをより掘り下げていくと“保健指導を通じてWell-beingについて考えること”を自分のテーマとしていると言えるかもしれない。学ぶうちにそのような方向がみえてきたとも言える。そもそも“お母さんががんばって産んでくれたのだから”命を粗末にしてはいけないという考え方には違和感があり、また安易に「命は大切」と言うことはできない。お産の時にお母さんががんばったのは確か。しかしそのことと「だから」のイコールとしての“あなたのいのち”は測れない。

“あなたのいのち”は無条件にただそれとして大切なのであって。そうでなければ、現実に親と良い関係を築けずに生きてきた子どもや死にたい気持ちをもつ子どもを前にもどのような言葉が届くというのか。各々の子どもが抱えるどのような問いにも、私なりの誠実さをもって一緒に考えていきたいという想いで行ってきた性教育である。

このことを支える一つとして、子どもから発せられる言葉をモチーフとして授業を行うことを大切にしてきた。具体的には、ワークシートを多用し、授業中には発言を促し

言葉を引き出してやりとりをするなかで、いのちの話は「どこかの」「誰かの」「手の届かない」「特別な」（例えば“赤ちゃんの”であるとか“妊婦さんの”といった）命の話ではなく“あなた”の話であることが理解され、“自分ごと”として捉えられるらしいことがわかってきた。そして常に子どもたちに問うてきたのは「いのちとは何か？」ということ。その問いに返してくれる言葉を編んで毎回、詩を創ってきた。ひとつひとつの詩が他のどこにもない“今”の“この自分（たち）”の「いのち」の定義。繰り返される「いのちとは何か？」への答えが織り重なっていくことで、大人から教わるものではない、自分たちにとっての“コタエ”が浮かび上がってくる。授業の終わりに私が詩を朗読する時の、子どもたちの少し緊張したような表情に気持ちが引き締まる。預かった言葉を、丁寧に、手渡すように。心の改まる時間である。

prologue

ヒトはコトバを持つ生き物だ。

心を器として、

そのなかにコトバを容れている。

「いのちって何だと思いますか？ 何を思いうかべますか？」

の問いかけに、

子どもたちは自分の器の中からコトバを探し、

ひとつ、あるいはいくつかを選びだして

そっと私の前に置いてくれる。

「いのち」という詩が

子どもたちに驚きと心動かすものとして受け容れられるのは、

自分の中にはない、友だちの中に在ったコトバに出逢ったことと、

自分の中に在ったコトバが詩の形で戻ってくることと、

自分“たちの”コタエとしての「いのち」をみつけれられたからではないか。

人から“与えられる”コタエではなく。

自分たちでつかみ得たものとして。

—— みんなで創った詩。 「いのちのうた」を。

「いのち」

作：S小学校3年生のみなさん

おかあさんのおなかにはいついてるとき、
わたしは“いのち”をもらった。
おかあさんが生んでくれたから、
わたしは今、ここにいて、
とても大切なんだと思う。

小さな赤ちゃんのいのち。
みのまわりにいる大切な人のことを想う。

いのちは、人のところをきくためにある。
人がいきぬいていくためにある。
みんなは、いのちをまもっているから、いきている。

命は、ゲームとちがって一つしかない。
一度なくなったら、または生きられない。
だから命を大切にしたいです。

どうぶつは生きていたけれどころされ、
人げんの食料にされる。
…かわいそうです。
でも、食料がなくなったら人はどんどん死んでしまうから——、
どうぶつや、やさいにかんしゃします。

「いのち」は大切なもの

「いのち」生きるためにひつようなもの
「いのち」はうまれるもの
「いのち」はいつかなくなるもの。

いのちはうまれた人へとつがれていくもの。
大切な、先ぞからうけつがれてきたバトン。



Gift